

スイートデビル・キス

目次

スイートデビル・キス

5

スイートバスタئم・パニツク

269

スイートデビル・キス

第一話 天使と小悪魔

——私には、悩みがある。
家族にも、友達にも、誰にも言えない悩み……

『大好きだよ。華乃……』

耳元で甘く囁かれたかと思えば、唇に柔らかいマシユマロのようなものを優しく押し当てられ、私の心臓は甘やかにトクリと跳ねる。

今のは、キス……？

重たいまぶたをゆつくり開くと、そこには天使のような容姿をした青年が一人。

「優斗……？」

天使は清廉な笑みを浮かべるだけで、私の質問に否定も肯定も返さない。

その代わり、また一つ柔らかなキスを落とした。

「ん……」

ああ、私はまた……



寝る前に三つかけた目覚ましの音と、携帯のアラーム音がけたたましく鳴り響き、私、瀬名華乃は勢いよく体を起こした。

「……つひゃー！」

瞬きを数回して、あれが夢だったことに安堵する。唇を指先でそつとなぞると、頬がほんのり熱くなったのがわかった。

「また、あの夢……」

目覚ましとアラームを止めることも忘れ、夢で見た唇の感触を思い出す。

どうしてあんな夢を見てしまったんだろう。ううん、見てしまったというより、見続けていると言った方が正しい。なぜなら、あれは今日に始まったことではなくて、中学生ぐらいから頻繁に見ている夢だからだ。

相手が知らない誰かなら、もしかして運命の相手かも？ なんて年甲斐もなく乙女チックなことを考えたかもしれないけれど、残念ながら違う。

「うう……私、最低……っ」

自己嫌悪に苛まれ、ベッドの上でゴロゴロ転がっていると、ノックなしに部屋の扉が開いた。

「ひゃっ!?!」

寝ぼけ眼を擦りながら入ってきた青年の姿を見て、ドキッとする。

「華乃ちゃん、朝だよ！ ……って、あれ？ 起きてたんだ。もしかして寝ぼけてる？ 目覚まし鳴りっぱなしになってるよ。家中に響いてる」

「え!? あっ！ ……ご、ごめん！ 消し忘れてた」
「ホントに朝弱いよね…」

天使のような笑みを浮かべて近付いてくる青年は、私の弟・瀬名優斗。

「起こしちゃってごめんね。優斗、昨日も遅かったんでしょ？」

「大丈夫だよ。今日は早起きするつもりだったし。ていうか、またすごい寝癖だね。また乾かさないうちに寝ちゃった？」

すっかり乾かしたけど、寝相が悪かったせいでボサボサになっただけ。

そんな私の髪を、優斗は長い指で丁寧に直す。髪をいじられるのが心地よくて、また眠くなってくる。私があくびをすると、優斗も続いてあくびをした。

「華乃ちゃんのおくびがうつったー…」

「優斗、いつも夜中まで残業してるけど体は大丈夫なの？ 無理してない？」

優斗は今春、四年制の情報系大学を卒業して、今は大手ゲーム会社のシステムエンジニアとして働いている。

「全然平気！ 学生時代からうちの会社でバイトしてたからもう四年目だし、すっかり慣れちゃったよ。元々短眠派だし、僕こう見えて結構丈夫だからさ」

「不規則な生活を続けてたら、いつ病気になるかわかんないんだよ？」

「んー…でも、辛いかも思ったことないなあ…まあ、気を付けるよ。心配してくれて、ありがとね」

寝不足なはずなのに、ニッコリ笑った優斗の顔はとても明るく健康的で、肌も触ってみたくなくなるくらい白くてスベスベ。

生まれつき色素の薄い栗色の髪は染めたみたいに綺麗な色をしていて、サラサラのフワフワだ。クリッとした瞳に、スッと通った鼻筋。中性的な顔立ちはその辺にいるアイドルよりも可愛くて、何かにたとえるときたら「天使」がピッタリだ。

うつとりしてしまいうくらいの美貌で、毎日見てもちっとも飽きない。こんな綺麗な顔立ちだったら、毎日鏡を見るのが楽しいだろうな。

「ん？ ジッと見てどうしたの？ 僕の顔に何か付いてる？」

優斗は首を傾げて、ぼんやりしている私の顔を覗き込む。

二十二歳の青年には見えない愛くるしい仕草に、思わず口元が綻んだ。

「ううん、なんにも付いてない。ただ、綺麗な顔立ちで羨ましいなあって思ってる…」

一方私はいえ、鏡を見てもちっとも楽しくない、ごくごく平凡な顔立ちをしている。

「何言ってるの？ 僕なんかより華乃ちゃんの方が綺麗だし、可愛いじゃん」

「あはは、慰めてくれるの？ ありがと」

優斗と私は全く似ていない。なぜなら私たちは本当の姉弟ではなく、血の繋がりが無いからだ。

私たちが姉弟になったのは、私が小学四年生の時、優斗が二年生の時だった。

私が産まれる前に離婚して、シングルマザーの道を歩んでいた母と、妻と死別してしまってシングルファーザーになったお義父さんが友人を通じて知り合い、そのうち惹かれ合ってめでたくゴールイン。

両親は私と優斗が仲良くなれるか不安だったらしいけれど、私は優斗みたいな優しく可愛い弟ができたことが本当に嬉しかった。優斗もまだ幼かったからか、反発することなくお母さんと私に懐いてくれた。

大人になった今でも、私たちは親友のように仲がよくて周りの友達に羨ましがられるくらい。可愛くて素直で優しい優斗は、自慢の弟だ。

「慰めてないよ。本当のことで……」

「そんなことより、今日は休みなんでしょ？」

これ以上慰められると切なくなるから、途中で切ることにした。それが不満だったのか、優斗は唇を尖らせ、ほんの少し頬を膨らませている。

……やっぱり、可愛い。

窓を開けて「うちの弟はこんなに可愛いですよー！」と自慢したくなるくらいの可愛さだ。姉バカだとわかっていても、可愛いのだから仕方ない。

「起こしちゃった私が言うのもアレだけど、二度寝してゆっくり休んで？」

「そんなわけにいかないよ。今日は華乃ちゃんの引越しの日でしょ？ 手伝って前から約束し

てたじゃん」

大学を卒業後、私は中小企業の事務として就職した。

実家を出て一人暮らしすることを目標に、コツコツ貯金をし続け約二年、ついに目標金額を達成！ 今日から夢の一人暮らしをすることになっている。

「でもさ、やっぱりわざわざ一人暮らしなんてする必要なくない？ 会社には実家からでも十分通えるし、父さんも義母さんも応援するとは言ってたけど、正直寂しがつてるよ」

「それはわかってるけど、やっぱり一人暮らししてみたいんだもん。自分好みのインテリアで統一したりとか……私も、もう二十四歳だし、一人暮らしするのも人生経験のうちかなーって……」

そう、それも理由の一つ、嘘じゃない。

「ふーん……？」

ジッと見つめられると、後ろめたくなって目を逸らしたくなってしまふ。綺麗な黒目がちの瞳には、何もかも見抜かれているような気がしてソワソワする。

「わ、私、そろそろ着替えるね。ほら、出て行って」

優斗を無理矢理部屋から追い出し、大きなため息をついた。

私が一人暮らしを決めた最大の理由……それは、あの夢のせいだ。

——中学生ぐらいから毎晩見るようになった、見てはいけないあの夢……

『大好きだよ。華乃……』

夢の中の優斗がそう甘く囁き、そっと私に唇を重ねてくる夢。

「ううう……私、最低……っ！」

一度や二度見たくらいなら変な夢を見たなあくらの笑い話で済むけれど、毎晩のようになんてどう考えてもおかしい。

「華乃ちゃん、早く朝ご飯食べないと、引っ越し業者が来ちゃうよ〜」
階下から呼ぶ優斗に返事をして、急いで支度を整えた。

リビングに下りると、優しい朝ご飯の香りが食欲を誘う。

「なんか今日で華乃がいなくなるなんて、ピンとこないわね。明日もご飯作っちゃいそうよ」
少し寂しそうな笑みを浮かべるお母さんを見てみると、涙ぐみそうになる。

昨日も「明日からは、華乃の夕飯を作らなくていいなんて寂しい」と呟かれたのだ。みんなの前では気丈に振る舞ったけれど、寝る前にベッドの中でちよつとだけ泣いてしまった。

「華乃ちゃん、早く食べないと冷めちゃうよ」

「そ、そうだね」

泣いてしまわないように頬の裏側をキュッと噛み、いつもの席に着く。

「華乃、聞きたいことがあるんだが……」

新聞で顔を隠してお義父さんが、少々気まずそうに話しかけてきた。返事をして、なかなか質問がこなくて首を傾げる。

「一人暮らしをするのは……本当に、その……アレではないんだな？」

「……アレって何？」

夢のことがバレたのかと一瞬だけドキッとしたけれど、誰にも話したことがないのだからそんなはずはない。

「その……だな」

なかなか続きの言葉がこない。

その間にも朝食の香りがふわふわと鼻腔をくすぐり、ついにはお腹がグウと鳴いた。

先にパクパク食べているお母さんや優斗を横目に、飲み物ぐらいなら口にしてもいいかと、お腹の虫を紛らすためにオレンジジュースを口に含む。

「……その、彼氏を連れ込む為……とかでは……ないんだな？」

「う……ぐっ……ケホッケホケホケホ！」

想像していなかった質問に驚いて、ジュースが思いきり気管に入った。

そんなわけないでしょ！ と声を大にして突っ込みたいけれど、それもちよつと情けない。とうよりも、今はむせていて無理だ。

「華乃ちゃん、大丈夫!?」

お義父さんの心配するようなことは、悲しいことに全くない。彼氏を連れ込むどころか、今まで一度も彼氏ができたことがないのだから。

「まあまあ、華乃だっという大人なんだから、彼氏の一人や二人いいじゃない……ねえ？」

お母さんがどさくさにまぎれて、探るように私を見てくる。

年頃の娘が、いつまで経っても彼氏の話をしていないことに、実は疑問を持っていたらしい。でも、

そんな探るような目で見られても、いないものはいないし、悲しいから言いたくもない。

「義母さん。今はそんなこと聞いている場合じゃないよ。華乃ちゃん大丈夫？ 水飲める？」

ああ、今は優斗が本当の天使に見える。

「ケホッ……ケホッ……だ、大丈夫……」

咳をしながらも頷くと、優斗が背中をさすってくれた。

好きな人ができて、それで終わり。恋人関係に発展したことなんて本当に一度もない。

小学校の時、数人の男の子に『ブス』と言われて苛められてからというもの、それがトラウマになっっているのか、男性と話すのがどうも苦手だ。

職場では男性と話すのも仕事だと割り切っているから平気だけど、プライベートだと意識した途端、話せなくなる。

まともに話した男性と言えば高校三年生の時、席替えて隣になった田宮くんが最後だ。

田宮くんは男女問わず人気のある明るく優しい男の子で、緊張して感じの悪い態度を取ってしまっていた私にも、よく話しかけてくれた。

そのおかげで田宮くんだけは少しずつ話せるようになり、それがすごく嬉しくて、毎日をとてもなく楽しく過ごすことができた。

……きつとあの時、私は田宮くんに恋をしていたんだと思う。

彼とはメールや電話のやり取りをするまでになっただけで、ある日を境にあちらの態度がそっけなくなり、電話やメールもパツタリこなくなった。

きつと私が幻滅されるような何かをしまして、嫌われたんだと思う。その原因が何だったのかは、今でもわからないままだ。

「華乃ちゃん、大丈夫？」

「うん、ありがとう。えっと、早く食べちゃわないと業者さん来ちゃうね。いただきまーす」

本当のことを言うのはやっぱり悲しいから、むせて質問なんて忘れてしまったということにして、ご飯をパクパク食べる。

「華乃がいなくなるなんて、本当に寂しくなるな……」

ポツリと零したお義父さんの言葉に、また少しだけ涙が出そうになった。

あんな夢を見なければ、もう少しだけ自立を先延ばしにしても構わないんだけど、事は一刻を争う——なぜならここ最近、あの夢を見る頻度が上がっているからだ。

どうしてこんな夢を見てしまうんだろうと悩みに悩み、辿りついた答えは、優斗を弟としてではなく、心のどこかで男性として見てしまっているんじゃないかということ。

あまりに男の人と接点がないから、身近な男性である優斗を夢に出して寂しさを紛らわせているのかもしれない。

……だとしたら、なんて最低な姉なんだろう。

こんな夢を見てはいけないのに、夜になれば見てしまう。

私を姉として慕ってくれている優斗に、こんなことがバレたら……

「……っ」

想像しただけで、背筋が冷たくなる。いくら優しい優斗でも、軽蔑するに違いない。
大好きな優斗に嫌われたら、生きていけない……!

あんな夢を見ている私に、優斗は無邪気に笑いかけてくれる。それが気まずいし、すぐ後ろめたい。優斗と離れたら、あんな夢は見なくなるかもしれないし、環境が変わることで私の何かも変わって、彼氏ができるかもしれない。

今までは男性と知り合うチャンスがあっても逃げてばかりだったけど、これからは積極的に参加しよう。そうすれば、きっとあんな夢は見なくなるはずだ。

家族と離れて暮らすのは寂しいけど今生の別れではないし、電車で数駅の距離だからいつでも会える。

「ごめんね。でも、もう決めたから!」

うん、寂しがつてなんていられない!

キラキラ輝く新しい生活を、一日一日大切に過ごそうと改めて決意した。



念願の一人暮らしを始めて、二週間が経とうとしていた。

「はあ、疲れた……」

会社近くに借りたアパートの一階、1LDKの部屋には、まだ荷解きが終わっていない段ボール

がいくつか積まれている。今日こそは全部片付けようと思っていたけれど残業になってしまい、既に時計は二十二時を指していた。

「うう、今日は疲れたし、明日こそ……」

こうして一人暮らしを始めると、今まで自分がどれだけ母に頼りきっていたのがわかる。

炊事、掃除、洗濯……実家にいる頃に、そこそこ手伝ってきたつもりではいたけれど、働きなから全てを一人でこなすのは、私にとってかなりの重労働。

……だけど、やっぱり一人暮らしを始めてよかったと心から思う。私が予想した通り、引っ越したその日から、優斗の夢を見なくなったからだ。

やっぱり無意識のうちに、大切な弟の優斗を一人の男性として意識していたのだろうか。

「うう、ありえない……優斗、ごめん……!」

自己嫌悪に陥り、ベッドの上で悶えてゴロゴロ転がっていると、携帯が鳴った。

「っ! ……優斗からだ」

優斗は引っ越したその日の夜から、毎日メールをくれていた。

『困ったことがあったら、遠慮せずにいつでも頼ってね』

『ちゃんと食べてる?』

『寂しくなったら、すぐに帰ってきなよ』

優しいことばかり書いてあって、感動してちよっと泣いてしまった。

「心配性なんだから……」

そして、私を姉として大切にしてくれている優斗の気持ち、夢の中とはいえ踏みにじっていたことが申し訳なくて、別の意味で涙が出てしまう。

ため息をつきながらカーテンを閉じようとする、洗濯物を干しっぱなしにしていたことに気がついた。

「あ、やばい。昨日の夜から干しっぱなしだったけ！」

朝になったら取り込もうと思っていたのに、寝坊してバタバタしていたからすっかり忘れてた。

雨が降らなくてよかったと、よく乾いた洗濯物に手を伸ばす。

「……あれ？ 足りない」

服に隠すように干しておいた下着が一枚なくなっていることに気付く、首を傾げる。

「そういえば、今日……結構風が強かったっけ」

飛ばされたのかもしれないとバルコニーから身を乗り出し、キョロキョロ辺りを見回したけど、下着らしきものは見つけれない。

「まさか、道路にまで飛ばされたとか!？」

近所に自分の下着が落ちている光景を想像し、赤面した。

は、早く回収しなければ！

急いで外へ出て家の近くを見て回ったけれど、どこにも落ちていなかった。

「うう、どこに行っちゃったんだろう……」

その日は、やっぱり風で遠くに運ばれてしまったんだろうと自分を納得させ、部屋に戻る。

けれどこの日を境に、洗濯物の下着だけがなくなるのが頻繁ひんぱんに起きるようになり、さすがに怖くなった私は、思いきって会社の先輩に相談してみることにした。

「えっ！ 一階なのに下着干しっぱなしで会社来てたの？ 不用心だよ！」

「でも、一応下着だつてわからないように、服でガードしてたんですけど……」
同じ総務課で、一つ年上の奈央ななさん。

艶つややかな黒髪ストレートに、パツチリくつきりとした目鼻立ちをしていて、美人なのにそれを鼻にかけることがない、とても気さくな人。こんな人になれたらいいなって密ひそかに目標めくにしている先輩だ。「ガードして干してたのになくなったんでしょ？ 飛ばされるとしたら、まず周りの服じゃない？」

「そう、ですよね……」

「それってさ、泥棒じゃない？ 下着泥棒！ 変態！」

心臓がドクリと嫌な音を立てる。

本当はそんな予感がしてたけど、自意識過剰だと自分に言い聞かせて、考えないようにしていた。だって、気付いたら怖くて実家に逃げ帰りたくなってしまふ。

「瀬名ちゃんちさ、カーテンの色は何色？」

「えっと、ピンクです」

ピンクのカーテンで女性物の服と下着を長時間干しっぱなしにするなんて、女性の一人暮らしだと周りに宣伝しているようなものだと言われた。

「そ、そっか……そうですね」

「しかも一階でしょ？ 余計気を付けなきゃ」

部屋を決める時、両親と優斗が一階は物騒だつて言っていたことを思い出す。

その時の私は、二階以上は家賃がプラス三千円だから勿体ないと感じたのと、なぜか自分に限ってそんな物騒な目にあうわけがないっていう漠然とした自信があり、反対を押し切つてあの部屋に決めたのだった。

……反発しないで、素直に聞いておけばよかった。

自立するのに、どうして家族の言うことを聞かなければいけないのかという変な意地もあったのかも知れない。なんて馬鹿で子供っぽい考えだったんだろう。

「やっと実現した一人暮らしだもんね。浮かれちゃう気持ちはわかるけど、物騒な世の中だし気を付けなきゃダメだよ」

「は、はい……」

その日から奈央さんのアドバイスや、インターネットで集めた防犯対策を試してみることにした。

一つ、下着は絶対に外に干さず、部屋干しに切り替えること！

二つ、女性だとわかる服も、長時間外に干しっぱなしにしないように徹底すること！

三つ、女性が住んでいるとわからないカーテンに替えること！

「これで大丈夫……だよね？」

思いつく限りの対処をしても、まだ恐怖と不安が消えてくれない。

落ち着くまで実家に帰ろうかとも考えたけれど、正直に事情を話したら心配させてしまう。

かと言って理由もなしに帰ったら、『どうせ寂しくなったんでしょ？ いつまで経っても子供なんだから』と笑われるのが目に見えている。

……それは、ちよつと悔しい。

「対策はしたし、大丈夫だよね！ 気にし過ぎちゃってるのかも」

恐怖を振り払うように首を左右に振り、乾いた洗濯物を畳んでみると、携帯が鳴った。確認すると、優斗からの着信。

「もしもし？」

『今、大丈夫？ 元気にしてるかな？ と思って、電話してみたんだけど……』

久しぶりに聞く優斗の声に、恐怖で強張っていた心が少し柔らかくなるのを感じた。

「……うん、大丈夫。元気だよ」

やっぱり家族には心配をかけたくない。

不安が声に出ないように、いつもより明るい声を出そうと意識する。

『本当に？ なんか声のトーン、いつもと違うように聞こえるけど？』

「そ、そう？」

『……無理して明るくしてるような感じがするけど、僕の気のせい？』

見た目はほんわかしているけど、優斗はとても鋭い。私が隠しているトラブルを見抜き、昔からよく助けてくれた。

「うん、気のせいだよ。本当に大丈夫だから」

少し涙が出てきて、声が震えそうになるのをグツと堪える。

『……それならいいけど。もし、どうしてもダメだと思ったら、父さんや義母さんには言えなくても、僕には話して。力になるから』

やっぱり優斗にはお見通しみたいだ。それでも心配をかけたくなって、大丈夫だと意地を張り続けて電話を切った。

自分で決めて一人暮らしを始めたんだから、家族を頼るような真似はしたくない。恐怖や不安なんて、時間が経てば薄れるはず。

「これも経験のうちだよね。うん……！」

数日の間はやっぱり少し怖かったけれど、一週間も経つと落ち着きを取り戻すことができた。

「窓に付ける補助鍵なんてあるんだ。……なにに？ 空き巣や強盗の侵入に時間をかけさせることで諦めさせたり、通報の時間を稼ぐ？ なるほど……買っておこうかな」

最近は、インターネットで防犯グッズを検索することが日課になっていた。見出すと止まらなくなって、あつという間に深夜。

気になった防犯グッズの購入ボタンをクリックし、満足してベッドにもぐりこむ。

「まだ届いてもいないのに、なんか達成感……」

遮光加工されていないカーテンを使っているから、電気を消しても部屋の内装がうっすらわかるくらいの光が入ってくる。急遽ピンクのカーテンを緑のものに買い直したけれど、遮光加工されて

いるものは高くて手が出なかつたため、こちらを買つたのだ。でも真つ暗にして眠るより、これくらい光がある方が落ち着くかもしれないなんて考えながらウトウトしていると、ギョツとするような光景が目飛び込んできた。

「なに!？」

ベランダに、ユラユラと人影のようなものが動いているのが見え、息を呑む。

う、ううん。大きなビニール袋が飛んできて、物干し竿に引っかかっているのかもしれない。ユラユラしているのは、きつと風のせいだ。

「最近干してないな……なんでだよ」

人ではないと思いつつも入っていた時、舌打ちをしながらぼそぼそ独り言を喋る男の声が聞こえ、私は恐怖のどん底に突き落とされた。

「ひっ……」

体中の血液が全部水になったみたいで寒くて、金縛りにあつてしまったように体が動かない。

……もし、このまま窓を割られて入ってこられたら？
最悪の予感が頭をよぎり、心臓が警報を鳴らす。

ガタガタ震える手をなんとか動かして携帯を掴み、画面の明かりが漏れてしまわないように布団に潜った。

誰か……誰か、助けて……！

「……っ」

震える指でアドレス帳から番号を呼び出し、祈るように発信ボタンを押した。

——お願い、出て……助けて……!

恐怖の中、頭をよぎったのは、両親や友達ではない。

『もしもし? 華乃ちゃん、どうかした?』

——大切な弟、優斗だった。



優斗はタクシーに乗ったらしく、十分も経たないうちに来てくれた。

『華乃ちゃん、着いたよ。ドア、開けられる?』

「……っ」

その声を合図にベッドから飛び起き、転びそうになりながら玄関まで走った。震える手で二つある鍵を一つ、そしてもう一つ外し、ドアを開ける。

「優斗……っ!」

久しぶりに見る優斗の姿に安堵し、涙がボロボロ零れた。

「もう大丈夫だよ。華乃ちゃん」

優斗は子供のように泣きじゃくる私を抱き寄せると、優しく背中を撫でてくれた。

優斗とこうして触れ合うのは、何年ぶりだろう。小さい頃はよくこうしてスキンシップをしたも

のだけど、大人になってからは初めてかもしれない。

触れ合った箇所から伝わる優斗の心臓の音を聞いていると、だんだんと震えが止まり、気持ちが悪く落ちてくる。

「何があったか話せる?」

「べ、ベランダに……変な人が……いて……」

「変な人!? ……ちよつとここで待ってて。今、ベランダ見てくるから」

「えっ! そんなの危ないよっ」

優斗は大丈夫だとニコリ笑い、私を玄関に残してベランダを確認しに行った。

さつきまでは混乱していて、まともに考えられなかったけれど、優斗を呼ぶなんて危なかったのではないだろうか。

犯人と鉢合わせしたら、何をされるかわからない。最悪の場合、逆上した犯人に襲い掛かれて、殺されてしまう可能性だってある。

「ゆ、優斗待って! い、行かないで……」

優斗にもし何かあったら……!

慌てて手近にあった傘を掴み、優斗の後を追いかけてようと足を進めたけれど、ガクガク震えて上手く歩けない。

「や、やだ……なんで……動いてっ……」

こうしている間にも、優斗が犯人と鉢合わせしているかもしれないのに!

壁に手をつきながらなんとか部屋へ戻ると、優斗が念入りに調べてくれている最中だった。

「優斗……?」

「ああ、こつちに来てても大丈夫だよ。もう誰もいないから」

その言葉に緊張の糸が切れてヘナヘナとへたり込む私を、優斗がしっかりと支えてベッドに座らせてくれた。

「え、華乃ちゃん。なんで傘持ってるの?」

「ゆ、優斗が犯人に襲われてたら、助けなきゃって思ってた……」

そう答えると、噴き出されてしまった。

「あははっ……お腹痛い……華乃ちゃん、たくましすぎ……っ」

確かに、助けて欲しいと泣きついておいて守ろうとするなんて、矛盾してたかも。

「……私の見間違いだっただの……かな? 寝ぼけてたとか?」

そうだったら良いという希望を込めて呟くと、優斗が首を左右に振って否定した。

「いや、違うと思う。ベランダに出て、携帯の明かりで照らして見てみたんだけど、足跡が残ってたんだ。サイズからいって、女の人のじゃないよ」

「……………」

再び恐怖のどん底に落ち、体がガタガタ震え出す。

「華乃ちゃん、もう大丈夫。僕がいるから……」

優斗は私の隣に座ると、まだ震えている手を励ますようにギュッと握ってくれた。大きな手はと

ても温かくて、同時に自分の手がとても冷たくなっていたことに気付く。

「あ、あのね……優斗、今までもね……」

気が付けば私は、今まで隠してきたことを包み隠さず話していた。

「怖い思いをしたのに、今までよく頑張ったね。えらかったよ」

予想外の反応に驚き、目を丸くする。だって、てっきり……

「どうして隠してたんだって、怒らないの?」

「怒らないよ。心配させたくなくて言えなかったんでしょ?」

優しく頭を撫でられると、また涙が溢れた。

どうして優斗には、全部わかってしまうんだろう。

「ねえ、華乃ちゃん。今度からは隠さないで、僕に何でも言っちゃって? この間も電話でそう言っちゃたよね?」

「それは……」

言葉に詰まった。頼っておいて今さらという感じだけど、優斗にこれ以上心配をかけるのは気が引ける。

なんて答えればいいのかわからず口を噤んでいると、優斗の方が先に口を開いた。

「心配するのは全然いいんだ。でも、華乃ちゃんが僕の知らない所で困って泣くのは嫌だよ」

優しい言葉がゆっくりと胸に落ちて、じんわりと温かく広がっていく。

「それとも、僕じゃ頼りにならない?」

間髪をいれずに勢いよく首を左右に振って、違うと否定した。そんなわけない。優斗は私が世界で一番頼りにしている人だ。

「頼りにならないって言われたらどうしようかと思っただけど、よかったよ。安心した……じゃあ、今度は絶対話してね？」

その言葉に、今度は素直に頷くことができた。

「ありがとう優斗……あの、このことお義父さんとお母さんには……」

「わかっている、内緒にしておくよ。せっかく一人暮らししたのに、心配だから実家に帰ってこいって言われちゃいそうだしね」

あまりに私の気持ちをわかってくれているものだから、つい笑ってしまう。

「ねえ、どうして私の言いたいこと、全部わかっちゃうの？」

「当たり前だよ。ずーっと一緒にいたんだからさっ」

優斗はいつもみたいに人懐っこい笑みを浮かべると、目元に残っている涙を袖で拭ってくれた。

「今日、どうしよつか。一人でいるの不安じゃない？ 僕は、今日は泊まっていこうか？」

「えっ……」

ほんの一瞬、見てはいけけない夢のことを思い出して心臓が跳ねる。

一人でいるのは不安だけど、優斗と一緒にいたらまたあの夢を見てしまうかもしれない。

「どうしたの？」

心配そうに私の様子を窺う優斗を見て、胸がチクリと痛んだ。

……私、最低だ。こんな時に、何を考えてるの？

「な、なんでもない。えっと、お願いしても……いい？」

自己嫌悪に押しつぶされそうになりながらもそう答えると、何も知らない優斗は「任せて！」と力強い調子で笑みを見せてくれた。

鋭い優斗でも、私が今、何を考えているかなんてわからないんだろうな。

……もつとも悟られたら困るけど。

寝る支度を整え、クローゼットにしまっておいたお客さん用の布団をベッドの横に敷く。

「優斗はベッド使って。私は下の布団で眠るから」

「え、僕が下で寝るからいいよ。華乃ちゃんはいつも通りベッドで眠って」

私の我儘で来てもらっているのだから、せめて少しでも寝心地の良いベッドで眠ってもらいたい。そう説明している間に、優斗はベッドの下に敷いてある布団へ潜り込んでしまった。

「僕、実はベッドよりも、床に布団を敷いて眠る方が好きなんだよね」

「……もう、嘘ばかり。本当にそうなら、いつもベッドじゃなく床で眠ってるはずでしょ？」

本当にどこまでも優しいんだから……

「そんなことより、こうして同じ部屋で寝るなんて、小さい頃以来だよね」

無邪気に笑う優斗を見ると、罪悪感で胸が痛む。

私があんな夢を見ることがバレてしまったら、いくら優斗でも軽蔑するよね。

軽蔑されたくない。無意識だからって、あんな夢を見るなんていけないことだ。

「なんだか懐かしいね……」

優斗の穏やかな声を聞いてみると、だんだん微睡まどろんでくる。あんな怖いことがあったのに、優斗がいるだけですごく心強くて、安心する。

次第に相槌あいつちを打つ口元が重くなってきて、反応も遅くなっていく。

「華乃ちゃん、もう眠っちゃった？」

優斗に名前を呼ばれた気がしたけれど、夢なのか現実なのかわからない。

そういえば、下着泥棒が出たとわかった日から、緊張して熟睡したことってなかったかも。

「……おやすみ、華乃ちゃん」

恐怖が解けた私は、久しぶりにぐっすり眠ることができたのだった。



女性が下着泥棒にあった時、被害届を出すのはとても恥ずかしいと友達から聞いたことがある。盗まれた下着のメーカー、サイズ、色形までこと細かく警察に報告しなければいけないらしい。

しかもその泥棒が捕まった時に自分の下着が出てきたら、警察に細かく確認された上で返ってくるそうだ。

……返されても、どうしたらいいかわからないよ。

優斗と一緒に近くの交番を訪れた私は、急にその話を思い出して青ざめた。

そこにいた警察官は私と大して変わらない年頃の男性、そして隣には優斗。

男性二人に自分の盗とられた下着についてこと細かに語らなければならぬと思うと、今すぐ逃げ出したいくなってしまふ。

「本日はどうなさいましたか？」

話しかけられた！ ああ、もう逃げられない。

真っ青になって口をパクパクさせていると、先に優斗が口を開いた。

「実は……」

優斗は下着が盗まれたとは口にせず、怪しい人物がこの近所を徘徊徘徊しているとの噂を聞いたので、ぜひパトロールを強化してほしいと話した。

「姉がこの近くに住んでいるので、僕心配で……」

瞳を潤うるませた優斗を見た警察官は、力強く頷く。

「わかりました。今晚から強化しますから、ご安心下さい！」

「本当ですか!? ありがとうございます！」

パアツと嬉しそうにする優斗がとても可愛くて、交番だということを忘れて見惚みとれそうになる。

……いけない。私ったら、何考えてるんだろう。

私の住むマンションは、道路からよく見える場所に建っている。パトロールを強化してもらえたら、下着泥棒も入りにくいに違いない。

ホッと胸を撫なで下ろしていると、優斗は「キミ、高校生かな？ お姉さん思いでしっかりしてる

ね」と警察官にいい笑顔で言われた。思わず嘖き出しそうになったけれど、なんとか堪えて交番の後にしたのだった。

交番を出ると同時に我慢が出来なくなり、お腹を抱えて大声で笑う。

「もく……笑うなんて酷いよっ！」

「ご、ごめ……っ……あは、あははっ」

優斗があらさまに引きつった笑みを浮かべていたのを思い出すと、笑いが止まらない。

「……はあ、苦しかった。ねえ、どうして下着泥棒のこと、言わなかったの？ ……というか、私が話さなきゃいけなかったんだよね。ごめん」

優斗はそんなことないとフォローしてくれたあとに、理由を話してくれた。

「前に友達から聞いたことあるんだよね。下着泥棒の被害届を出す時、女の子にとってかなり恥ずかしいことを聞かれるって」

下着のことを詳しく話すなんて絶対に嫌だろうなと思ったので、初めから警察には下着の件は言わずに、パトロールの強化だけをお願いするつもりだったらしい。

「ありがとう、優斗……！」

これで安心して暮らせる。

そう思っていた矢先、私は次の休日、両親に呼び出されて実家へ帰ることになった。なぜなら、親に下着泥棒の件がバレてしまったからだ。

「華乃、どうして黙っていたの？」

「義母さん、華乃ちゃんは二人を心配させないように……」

もちろん優斗が話してしまったわけじゃない。

「優斗も知ってたなら、どうして言わないの？ 何かあってからじゃ遅いのよ!？」

「優斗を責めないで。私が言わないでほしいって頼んだんだから！」

以前奈央さんに相談した時の話をおしゃべりな同僚が聞いていたらしく、私の知らないところで話のネタにしていたようだ。その話を聞いた人たちが自分の家族に話したところ、その誰かがうちのお母さんと知り合いだったようで、その人を通してバレてしまったのだ。

世間は狭いと聞くけれど、まさかこんなに狭かったなんて思わなかった。

「何度も盗まれたということは、もう女性の一人暮らしだとバレているということだろうか？」

お義父さんが渋い顔をして質問する。

「えーっ……そう……なのかな？」

そこで認めてしまったら実家に戻ってこいと言われそうだったので、あえて濁して答える。

「そうに決まっているでしょー！」

けれど通じるわけもなく、母に一喝されてしまった。

「今までは下着だけで済んだが、今度はどうなるかわからない。華乃、もう一人暮らしは止めて実家に戻ってきなさい」

「お父さんの言う通りよ。今住んでるところは諦めて、他の所に引っ越すっていうならいいけど、

今のところは……ねえ？」

お母さんに同調したお義父ととうさんが、うんうんと頷く。

「そんな……」

軽く言ってくれるけど、私に二度も引越す予算がないことは知っているはずだ。

両親の言うことが正しいのはわかっているけれど、二年間頑張ってやっと実現した一人暮らしだったからショックが大きい。

ガックリ肩を落としていると、優斗が待つてほしいと割って入ってきた。

「それってさ、女の人の一人暮らしだって知られてるのがまずいんでしょ？ だったらしばらくの間、僕が住んであげるよ」

「えっ……!？」

「せっかく二年間頑張って貯金してきたのに、こんな形で終わらせちゃうなんて可哀想だよ。僕が住んでも改善されないようなら、またその時に考えればよくない？ 二人とも、華乃ちゃんがどれだけ頑張って貯金してたか、知ってるでしょ？」

優斗の真剣な訴えに、強張よこばっていた両親の表情が緩んだ。だけど私は、優斗がこんなに親身になって説得してくれているのが嬉しい反面、最低なことを考えてしまう。

——優斗と一緒に暮らすことになったら、またあの夢を見るかもしれない。

「優斗が一緒なら大丈夫かもしれないけど……」

「そうだな。男が住んでいるのと住んでいないのでは、違うだろうな」

「あつ、もちろん一緒に住んでる間は、家賃・光熱費・食費は全部入れるから心配しないでね」

戸惑う私を置いてけぼりにし、みんなは一人暮らしだと食材を使いきれないから不経済だろうとか、男手があった方が何かと便利だろうなどと勝手に盛り上がり……

「……ってことで、華乃ちゃん。僕、今日からそっちに行くからよろしくね！」

「え、ええ!？」

そしてあつという間に、話をまとめられてしまった。

「ダメ？」

「あら、ダメなわけじゃないでしょ。それともダメな理由があるの？ 彼氏を連れて来れないとかそういう素敵な理由？」

「なっ……華乃、どうなんだ？ 男を連れ込むのか!？」

りよ、両親の目が、怖い……

お母さんの目はギラギラしていて、お義父ととうさんの目は怒りで血走っている。

怖い……両者、別の意味で怖い！

「ち、違うっ……! そんなんじゃない……その……優斗、今日からよろしく」

優斗と一緒にいると変な夢を見てしまうかもしれないから、嫌！ ……なんて言えるわけもなく、私は優斗と新たに二人暮らしをスタートさせることになったのだった。



二人暮らしを始めてから、ちょうど一週間が経つ。

「これでよしと……」

二人分の朝食を作り終え、優斗の分にラップをかける。すると、

「うーん……おはよー」

朝方に仕事を終えて帰ってきた優斗が、目を擦りながらノソノソと起きてきて食卓につく。

「おはよ。ごめん、うるさかった？」

優斗は首をフルフル振って違うと答えた。柔らかい髪の毛がフワフワ動いて、思わず触れたくなる。

「もう少し寝てなよ。出社までまだ時間あるんでしょ？」

「ううん……起きる。華乃ちゃんを作ってくれたご飯……食べたいもん」

くりくりの目を細めて笑うと、まさに天使。

自分の弟なのに、可愛さのあまり悶絶しそうだった。

「あはは、優斗の分まで食べたりにしないから大丈夫だよ」

「そうじゃなくて……温かいうちに、食べたくて……ふああ……」

再び悶絶しそうなのを堪え、冷蔵庫から優斗がいつも飲んでるりんごジュースを取ってあげた。

「もうすぐ二十点たまるんじゃない？」

「うん、次は何にしようかな。次々新しいデザインのが出るから、集めきれないんだよね……」

このジュースを一本買うごとにりんごのポイントシールが付いてきて、二十点ためるとりんごをモチーフにしたキャラクター、『リンリン』がプリントされた食器やカップと交換できるらしい。なぜかこのキャラクターにハマった優斗は、五年くらい前からせっせと集め続けている。

実家の食器棚の中には、集められた食器がたくさん収納されていて、お母さんが『リンリンのせいで別の食器が入らない!』と悲鳴を上げていたので、一人暮らしする時にいくつか分けてもらった。今日使っている食器もそれだ。

「あ、今日の皿、リンリンのだ」

この食器を使うと優斗が喜ぶので、ちよくちよく使っている。

温かいうちに食べたいと言われるほど、素晴らしい食事を用意しているわけじゃない。目玉焼きにウインナー、それにちよつとした野菜が入ったコンソメスープと食パンぐらいだ。

実家にいた時の方が美味しい料理が食べられたはずなのに、優斗は美味しいと言いながら嬉しそうにパクパク食べてくれている。

やっぱり可愛い……

明日はもう少し頑張つて、優斗が大好きなチーズのたっぷり入ったオムレツを作つてあげよう。

「……優斗って居酒屋に行ったら、年齢確認されない？」

「えっ、されないよ？」

否定しながらも、優斗の目はあからさまに泳いでいる。堪えられずにクスクス笑うと、頬を染め

てさらに否定してきた。

「何笑ってんの？ されないってば」

「嘘つき。優斗わかりやすいから、バレバレだよ」

笑顔の裏で、胸の奥がチクチクと痛む。

——なぜなら、またあの夢を見るようになったからだ。

「ぼんやりしてどうしたの？ ……もしかして、寝ぼけてる？」

「——！ そ、そんなことないよ。えーっと、私そろそろ会社行くね」

優斗が無邪気に接してくるごとに、罪悪感が強くなっていく。やっぱり私は無意識のうちに、弟を男性として見ているのだろうか。

胸の中のモヤモヤから逃げ出すように家を飛び出すと、自然と早足になる。歩いている間、夢を思い出し、ほんのりと唇が熱くなるのを感じた。

『華乃、好きだよ……』

甘く囁かれて柔らかな唇を押し付けられると、胸の奥が痺れたみたいに震え、そして……

「……っ……どうかしてる。私……」

見てはいけないと思っても夜になって眠れば、夢に囚われてしまう。

「どうすればいいの……？」



改善策が見つからないまま、いけない夢を見続けていたある日のこと。

定時に仕事を終えて帰宅した私は、キッチンに立って冷蔵庫の中を眺めていた。

「あれ、豚肉がない。……あーそっか、昨日使っちゃったんだっけ……」

今日はカレーを作ろうと思っていたのに、困った。

帰りに買い物してくればよかったと後悔していたら、玄関の扉が開く音が聞こえる。

「たっだいま〜！」

「えっ、優斗!？」

時計を見ると、まだ十九時。

「どうしたの？ こんな早くに」

普段なら残業で夜中にしか帰ってこれないのに、こんな時間に帰るなんて珍しい。しかも大きな買い物袋を持っている。

「いつも頑張ってるから、先輩がたまには早く帰んなーって言ってくれたんだ」

優斗は嬉しそうにニコニコしながら、テーブルに買い物袋の中身を並べていく。

「見て見て、これ。早く帰れたのが嬉しくて、いっぱい買ってきちゃった！ これから飲もうよっ」

買い物袋から出てきたのは、ビール、ウイスキー、サワー、梅酒といったたぐさのお酒だった。

「う、売ってもらえたんだ……」

「何それっ！ 普通に買えたしっ！」

ご飯がまだできていないことを告げると、たまには楽をしようと宅配ピザを頼むことになった。久しぶりのピザに私も優斗もテンションが上がり、どのメニューにするかで盛り上がる。

あれにしようか、これにしようかと色々迷ったけれど、結局はオーソドックスなものに決めた。届いたピザの生地にはトマトソースがたっぷり塗られていて、とろけたチーズの上には輪切りにされたピーマン、フレッシュトマト、薄切りのサラミがたっぷり。

ピザのお供に私はオレンジサワー、優斗は顔に似合わずビールを選んだ。

「ううう……っ……チーズトロトロ！ 美味しいいっ〜！」

「華乃ちゃんの作ってくれたご飯の方が、何百倍も美味しいけどね」

お世辞でも嬉しすぎる言葉に、ジンとする。

「優斗って、本当にイイ子だよな」

「何？ 急に」

「だって反抗期らしい反抗期もなかったし、こうやってお世辞まで言ってくれて……」

どうしてこんなにイイ子なんだろう。

私は、あんな夢を見る最低な姉なのに……

「……華乃ちゃん、まだ半分も飲んでないのにもう酔ってる？ ちょっと涙目だけど」

お酒に弱いのは事実だけど、まだ酔ってない。本当のことを言っただけなのに、酔っぱらい扱いされてしまった。

「まだ酔ってないっ」

否定したのに、「酔っぱらいはみんなそう言うんだよ」と、やっぱり酔っぱらい扱いされた。

「ふんだっ！ ちょーっど飲めるからって、いい気になってさー……」

ちなみに優斗はこんなベビーフェイスなのに酒豪で、いくらでも飲めるらしい。

それにしても、いつ見ても未成年が飲んでいるみたいにか見えな。外で飲んでいるのを警察に見られたら、補導されること間違いなしだ。

「何ジツと見てるの？ ……もしかして、失礼なこと考えてない？」

「失礼っていうか、優斗が未成年にしか見えなっていうのは事実で……」

だんだん優斗の機嫌が悪くなるのがわかり、慌てて口を噤む。

「……って、ううん、なんでもない！ あはっ」

笑って誤魔化していると、優斗がテレビのリモコンに手を伸ばした。

「あれ、何か見たい番組でもあるの？」

私の質問に、優斗はイタズラっ子みたいに笑って答える。

「今日、心霊特集やるんだって。一緒に見ようよ」

「えっ……ちよっ……！」

答える間もなく電源をつけられ、ちょうど心霊写真のドアアップが目に入った。

おまけに私の座っていた位置はテレビの真ん前。

「ひいやあああああ！」

不意打ちで恐ろしい物を見せられ、観客や芸能人の大げさな絶叫に負けない悲鳴を上げてしまっ

た。

「すごっ！ テレビの悲鳴より大きいよ。ていうか近所から苦情が出るレベル……」

「ゆ、優斗が悪いんでしょ！ ……私、見るなんて言っていないのにっ……！」

画面が目に入らないように背を向け、必死に抗議した。

怖い映像は見えなくなっただけど、スタジオで霊能力者が写真を解説する声が聞こえてきて、ゾワツとする。

私がこういう番組苦手だって、知ってるはずなのにっ！

「だって、華乃ちゃんが僕のこと子供扱いばかりするから」

どうやら優斗なりのささやかな反撃だったらしい。

優斗は少し頬を膨らませたけど、本気で怯える私を見かねてチャンネルを替えた。

イジワルを長続きさせられないところが、なんとも優しい優斗らしい。

「ちよっと怖がらせたかっただけなんだけど、いきなりすごいシーンだったね。……ごめん、悪気はなかったんだよ」

イイ子過ぎて、胸が痛い。

「ううん、私こそごめんね」

別の意味も含めて、心から謝る。

あんな夢を見てしまって、ごめんなさい……

自己嫌悪に苛まれてっていると、私の携帯に着信が入った。

チラリと優斗の方を見ると、早く出なよと言ってくれたので、遠慮なくそうさせてもらう。

「由紀、久しぶりだね」

『もしもし？ 久しぶりっ！ 元気だった？』

由紀は大学時代に一番親しくしていた友達で、社会人になってからもちよくちよく遊んでいる。

『あのさあ華乃、彼氏できた？』

いきなりの質問に苦笑いを浮かべ、小声で正直にいないと答えた。

『よかったー！ 実は今度合コンすることになったんだけど、メンバー足りないんだよね。華乃、参加してよっ』

「えっ！ ううん、私合コンなんて……」

いつものくせで「行かない」と即答しそうになるのを、グツと堪える。

臆病になっていたらダメだ。せっかく男性と知り合うチャンスなのに、こうして棒に振っていたら、いつまで経ってもあのいけない夢から逃げられない。

この前決意したばかりじゃない。前に進まないと……！

「……行くっ！」

『えっ！ 本当に？ 冗談とかじゃなくて？』

自分から誘ってきたくせに、相当驚いているようだ。

まあ、無理もない。今まで何度誘われてもOKしたことなんてなかったから。

「冗談じゃないよ。……で、でも、私ちゃんと話せるかな？ その場の雰囲気悪くしたりしない？」

私、そういうの苦手で……」

OKしたけれど、初めての合コンは不安でいっぱい。想像するだけでも緊張で胃がキリキリする。『その辺は私がフォローするから大丈夫！ 安心してよ』

頼もしい由紀の言葉にホッとしていると、『その代わりに』と言葉が続いた。

『イケメンの弟くん、紹介してよっ』

「……えっ!? しよ、紹介?」

心臓がドクンと嫌な音を立てた。

『あ、もしかして彼女とかいたりする?』

「ううん、今はいないはず……わ、わかった。あの子がいいって言ったらね……ていうか、合コンするのに、紹介もして欲しいの?」

優斗が承諾したら、由紀と付き合う可能性が出てくるかもしれない。そう考えると、酷く胸の中がざわつく。

『それはそれ、これはこれなの! ……つてことで、詳しい日時が決まったらメールするからっ! じゃ、またっ』

弾むような声に圧倒され、返事をした時にはもう通話が切れていた。もう繋がっていない携帯を見ながらため息をつくど、視線を感じる。

「どういう心境の変化?」

その言葉に顔を上げると、優斗が不機嫌そうにこちらを見ていた。

「な、なんのこと?」

「合コンの話。今までそういう誘いがきても、断ってたじゃん」

会話の流れから、バレてしまったらしい。正直に理由を言えるわけもなく、なんとなく、と誤魔化す。『ふーん……?』

「そ、そんなことよりさ。ピザ一切れ余ってるよ。優斗食べちゃって」

それからなんとなく会話が弾まなくなり、優斗もどこか面白くないように見える。

私はそんな気まずさを誤魔化すようにお酒に手を伸ばし続け、気が付いた時にはすっかり飲み過ぎていた。

「華乃ちゃん、大丈夫?」

頭がフワフワして、瞼が重くて開けていられない。

眠い、ただとにかく眠い……

「うーん……」

優斗は私以上に飲んでいるのに全く酔っぱらってないらしく、ソファにもたれかかってウトウトする私を心配そうに覗きこんでいる。

酒豪、恐るべし……!

「こんな所で寝たら風邪引いちゃうよ。ベッドに行こう?」

そんなこと言われても、足に力が入らない。

というか、もうここがどこでもいい……

「華乃ちゃん、寝たらダメだよ」

わかったと返事をしながら微動だにできずにいると、体がフワリと持ち上がった。

「ふえあつ!」

何ごとかと思えば、優斗の顔がものすごく近い。

「あははっ、すっごい間抜けな声。急に抱き上げたからビックリした？ 大丈夫だよ。このままベッドまで運んであげるから」

優斗の言葉で、この浮遊感の正体がわかった。

私は抱きかかえられて、ベッドに運ばれているらしい。優斗の腕は私をガツシリと支えていて、ビクともしない。

私、重いのに！ それにたらふくピザを食べた上に、いっぱいお酒を飲んだから、絶対増量してはるはずなのに！

なんでこんなに力持ちなのか質問しようと口を開いたけれど、全部囁んでしまい笑われた。

「はい、到着。具合悪くない？ 水飲む？」

壊れ物を扱うようにそっと寝かせてもらうと、なんだかお姫様になった気分。大丈夫だと答える前に眠気が襲ってきて、口元を動かすだけで発音できない。

もう、ダメ……目を開けてられない。

「おやすみ、華乃ちゃん」

優斗の天使みたいな笑顔に見送られ、私は夢の世界へ落ちて行った。



『華乃……』

甘く優しい声が鼓膜を震わせると、私の心臓がトクリと鳴った。

誰……？

『華乃……』

これは、優斗の声……？

そっと目を開くと、天使みたいな笑みを浮かべる優斗の姿。

『優斗……？』

名前を呼ぶと、返事をするように綺麗な指先で髪を撫でてくる。それがとても気持ちよくて、私はうっとり目と目を細める。

『気持ちいいんだ？』

小さく頷くと、優斗は形の良い唇を綻ばせて小さく笑う。

『可愛いね……もっと撫でてあげるよ。でも、その前に……』

優斗は私にそっと覆いかぶさると、優しく唇を重ねてきた。

「んっ……？」

ああ、私、またこんな夢を見てしまつてる。
さつき抱き上げられた時、たくましい優斗を見て、やっぱり男の人なんだなあって密かに思ったから？ だからこんな夢を見たのかな？

夢の中だつて、こんなことをしていいわけがないのに……
罪悪感で胸がいっぱいになって、顔を逸らしてキスから逃げる。でも、すぐに大きな手が追いかけてきて、頬を包みこまれた。

「あ……………」

顔を元の位置に戻されると、再び唇を重ねられてしまう。

『逃げるなよ』

優斗らしくない乱暴な言葉遣い、そして見たことがない挑発じみた笑みに驚いていると、優斗が唇を啄み始めた。

「……………」

——何……………？

いつもの夢なら、優しく唇を重ねるだけで終わるはずだ。

『イイ子にしてたら、気持ちよくさせてあげるよ』

「な……………んう……………」

柔らかい唇が食むように私の唇を挟み、下唇をちゅつと吸う。

——これは、何……………？

奪われた唇が熱を持ち始め、息がかかるとゾクゾクする。

「ん……………う……………つ……………はあ……………」

甘い息苦しさから新鮮な空気を求めて唇を開くと、ヌルリと熱い何かが入ってくる。

「……………ふ、う……………ん……………んう……………つ……………」

それが舌だとわかるのに、時間はかからなかった。

舌先で丁寧な歯列をなぞっていたかと思うと、下顎の裏をヌルヌルと舐められる。

舐められて濡れた唇に熱い息がかかると、体が小さく震えた。

「……………つ……………」

口の中をヌルヌルクすぐられる感覚に、体の奥がズクリと疼く。

くすぐったいような、もどかしいような不思議な感覚。次々と与えられる刺激に、ぼんやりしていた脳がだんだん覚醒していくのがわかる。

——これが、本当に夢なの？

嫌な予感に、心臓がドクリと大きく跳ねた。

ドクリ、ドクリ、ドクリ……………

心臓の音が、すごく大きく聞こえる。

恐る恐る目を開くと同時に、私の唇や口内を貪っていた優斗が唇を離す。

「あ……………」

カーテンから漏れた月明かりに照らされた優斗は、自身の濡れた唇をペロリと舐めた。あまりに

も艶つぽい表情に、目が離せない。

——これって……

「あれ、起きちゃった？」

優斗はいつもみたいにニッコリ笑うと、人差し指で私の唇をなぞった。

「……っ!？」

目を丸くする私を見て、優斗はクスクス笑う。寢室のすぐ横にあるリビングには、酎ハイやビールの空き缶、それにピザの空箱が見える。

「な……っ……え？」

慌てて体を起こすと、頭がぐらぐら揺れて気持ち悪い。酔っぱらい過ぎて、幻覚でも見ているんだろうか。うん、そうであってほしい。

けれどそのわずかな希望は、優斗の残酷な一言ですぐに打ち砕かれることになった。

「あーあ、初めて失敗しちゃった。まあ、いいけど」

「初……めて？ 失敗……？」

一体どうということなの？

口を動かすと、さらに脳が覚醒していくのがわかった。

——これは、夢でも幻覚でもない……現実だ。

「そうだよ。いつもこうして唇を味わってたんだ。まあ、いつもは軽くチュッて触れるだけだったけど」

「いつ……も？」

優斗は呆然とする私を見つめ、お腹を空かせた肉食獣みたいに自分の唇をまたペロリと舐める。

「キスするの、これが初めてだと思った？ 初めてこうしたのはずーっと昔、中学生の時だよ」

衝撃の事実、驚愕した。

私が優斗とキスする夢を見るようになったのは、ちょうどその頃だったからだ。

「じゃあ、私が夢だと思ってたの……は……」

「寝ぼけるから記憶にないんじゃないかと思ってたけど、夢だと思ってたんだ？ 華乃はバカだね。夢なんかじゃないよ。ぜーんぶ、現実」

「う……そ」

さっきまで貪られていた唇が、小刻みに震える。

「嘘じゃないよ。僕が華乃の唇を奪ったんだ」

優斗は悪びれた表情は一切見せず、楽しそうに笑う。

こんな優斗、知らない。

私の目の前にいるのは、本当に優斗なの……？

どう反応していいかわからなくて、口をパクパクさせることしかできない。

「ね、僕とキスする夢を見た後に、僕と顔を合わせるのってどんな気分だった？」

「……っ」

カアツと顔が熱くなる。

私が今までどんな気持ちだったか、優斗にはきつとわかってるんだ。悔しくて、恥ずかしくて、涙が出そうだ。

私のそんな様子が面白いと言うように、優斗はクスクス笑い続けた。

「……なんで、こんなことしたの……？」

「華乃が好きだからだよ」

とんでもないことをあつさりと言われて、ギョツとする。

次の瞬間、驚きのあまり私は口をポカンと開き、そのまま凍りついた。

「何、言ってる……」

「好きだよ、華乃。だからキスしたんだ。今までも、さつきも……」

「お、お願い、からかわないで……冗談は止めて？ これ以上私を混乱させないで……」

心臓が壊れそうなくらい早鐘を打っている。

これは、本当に現実なの？ 目の前にいるのは本当に私の弟なの？

「冗談でこんなことができると思う？」

突然肩を押された私は、バランスを崩してベッドに倒れた。

「きゃ……っ！」

起き上がりたいのに、酔いが回っていて体が言うことを聞いてくれない。

ギシツとベッドのスプリングが軋む音が聞こえる。気が付いた時には、私の上に優斗の姿。

「優斗……どいて……」

覆いかぶさった優斗の瞳は月明かりに光り、戸惑う私の姿を映す。

「僕が素直にどくと思ってる？」

優斗は鼻で笑うと、私の唇を猫のようにペロリと舐めた。

「や……っダメ……っ！」

これ以上されたら、姉弟に戻れなくなってしまう。

抵抗しようと両手を伸ばしたけれど、あつという間にベッドへ縫い付けられた。

「止めて……っ」

どこからこんな強い力が出るんだろう。抵抗してもピクリとも動かせない。足の間にはいつの間にか優斗の足がねじ入れられていて、本当に身動きが取れなくなっていた。

「もう弟でいるのはおしまい。これからは遠慮してやらない……」

こんな表情をする優斗を、私は知らない。

「や……待って……優斗……なんで、こんな……」

そう言っても、優斗は待ってくれない。

心のどこかではわかっていた気がする。それでも懇願せずにはいられなかった。

「他の男が見えなくなるくらい、僕でいっぱいにしてあげる」

優斗は天使のような笑みを浮かべながら、私に顔を近づける。

——天使？ ううん、これじゃ天使なんかじゃなくて……

「や……っ……んうう」

再び唇を重ねられ、欲望で熱くなった舌が唇を割って侵入してくる。逃げるように引つ込めた舌はあつという間に攫さらわれてしまい、ねっとり絡からめられた。

「……………んん……………」

くすぐるように動いていたかと思えば、大胆にヌルヌルと擦こすりつけられ、そのたびに体が自然とビクビク動いてしまう。

そのうち自分の舌なのか、優斗の舌なのかわからなくなってきた。二人の舌が溶けて一つになってしまったみたいだ。どこまでが自分のなのかわからない。

「……………」

舐なめられているのは舌なのに、全身が溶かされてしまったように力が入らないのはどうして？

これは、なんなの？ 一体どうなっているの……？

どちらのものかわからない唾液が喉に流れていく。

「……………んく……………」

呑み込むたびに体の奥がジンと痺しびれ、そこから生まれた熱が全身に広がった。お腹の奥がキュウキュウ疼うずいているみたいで、身悶みもだえしてしまう。

何？ どうしてこんなにそこが疼くのか？

体の変化に驚いていると、チュツという音を立て、優斗がゆつくりと顔を上げた。

静かな部屋の中、自分の乱れた息遣いと心臓の音がやけに大きく響く。

「可愛いね。キスだけで感じちゃったんだ？」

クスツと笑った優斗の顔は天使のようだったけど、言っていることは天使じゃない。

——これじゃ、悪魔だよ。

「……………ね、もっと気持ちよくしてあげるよ。だから、合コンなんて行かないで？」

「や、ダメ……………これ以上は……………んん……………」

「足りない？ じゃあもっと……………」

——小悪魔はまた天使のような笑みを浮かべて、私の唇を貪むさぼったのだった。

第二話 小悪魔のたくらみ

唇を離された後も、私はベッドから起き上がれずにいた。

「……………はあ……………は……………あ……………」

どうして力が入らないんだろう。優斗はそんな私を見て、満足げに微笑んでいる。

「華乃の唇って、ホント気持ちいい。柔らかくて、しっとりしてて、ずーっとキスしてたくなる」

長い指先で唇をふにゅふにゅされると、優斗の唇の感触が思い出されて心臓が跳はねた。

「や……………もう、ダメ……………」

自分の声じゃないような甘い声に驚き、思わず自分の口を両手で押さえると、その手に柔らかな唇を押し当てられた。

「……………！」

「可愛い声……もつと聞きたいな。ねえ、どこを触ったら今みたいな声、聞かせてくれる？」
低く甘く囁かれると、心臓の音が激しくなっていく。何も言えずにいると、耳にチュツとキス
落とされ小さな悲鳴を上げた。

「華乃、僕のモノになつてよ」

優斗の大きくて熱い手が服の中に入りこんできて、腹部を通つてもつと上を目指す。

「……………待つて……ダメ！」

優斗の指先がブラジャーに触れた瞬間、服の上から優斗の手を掴んでそれ以上動かないようにす
る。

「……………私、優斗のモノにはなれない！」

震えた声だつたけれど、ハッキリ伝える。けれど優斗から返ってきた言葉は「どうして？」とい
うものだった。

「どうしてつて……私たち、姉弟なんだよ？ 恋人になんてなれるわけないじゃない……………」

「そうだね姉弟だよ。でも、血は繋がってないから問題ない。十分恋愛できるよ」

私たちには血の繋がりは無い。私たち家族には、だからこそ、その言葉を口にしてはいけないと
いう暗黙のルールがあった。けれど目の前にいる優斗は、気にする様子なんて微塵もない。

「そ、それは……………」

服の中に入りっぱなしになっている優斗の指先が、私をくすぐるように動く。

「……………や……………くすぐった……………」

押さえつけているからその指が上に行くことはないけれど、優斗に本気を出されたら私の力なん
てないに等しい。このままでは、優斗のいいようにされてしまう。

「血の繋がりが無いんだから、セックスするのは悪いことじゃないよ。何の問題もない」

心臓が大きく跳ね上がり、今までに体験したことないぐらゐの速さで脈打つ。

優斗の口からこんないやらしい単語が出てくるなんて、信じられなかった。

顔がカアツと熱くなる。そんなこと言わないでと怒りたいのに、口が開け閉めされるだけで何も
言えない。

「顔、真つ赤だよ？ ……もしかして、想像した？ 僕のが、ここに入つてるとこ」

私の足を開かせるように入り込んでいる優斗の太腿が、ショートパンツの上から大事なところを
刺激するようにグリグリ動く。

「……………っひあん……………っ！」

触れられた箇所から電流が走つたみたいだった。口から飛び出たのはあまりにもいやらしい声で、
恥ずかしくて涙がにじむ。

「ここ弄られるの好きなんだ？」

優斗はクスクス笑いながら、さらに太腿を押し付けてきた。

動かされるたびにショートパンツがきわどいところまでずり上がり、ショーツが食い込む。優斗
の動きに合わせて体が揺れそうになるのは、どうしてなの？

「や……あ……グリグリしないで……っ！」

もっと強く怒りたいのに、体の力が抜けて甘えるような声しか出てこない。恥ずかしい声なのに、優斗はもっと聞きたいと嬉しそうに笑う。

「……っ……笑わないで……」

気が付けば涙を流していた。姉の威厳いげん全くナシ……弟に泣かされるなんて、子供みたい。けれどしていることは子供じゃない。大人がする、いやらしいことだ。

袖で拭ぬぐっても涙は次々と溢あふれてくる。一日のうちに、色々なことがありすぎて、消化しきれない。「……泣くほど、嫌だった？」

さっきの笑顔はどこに行ってしまったんだろう。優斗の顔は、泣きだしてしまいそうなほど悲しげだった。

その顔を見ていると胸の奥がツキリと痛み、私は無意識のうちに首を左右に振っていた。

優斗を悲しませたくない。優斗にはいつも笑っていてほしい。

唇を貪むさぼられて、更には体を弄もよほばれているというのに、私ときたらまだ姉としての心を捨てられないでいるらしい。

「へえ、嫌じゃないんだ？ ってことは、まだ僕にも脈はあるみたいだね。まあ、諦める気もないけど」

「へ!？」

悲しそうな顔はどこへ!? 優斗は一瞬で笑みを取り戻した。

まさか、はめられた!?

足の間から太腿が抜かれたのに、ショートパンツ越しに押し付けられたショーツが秘部に張り付いていることに気付いて、また心臓が跳はねる。

「……っ!？」

こんな時に月のモノが始まってしまったのかと焦あせったけれど、なんだかヌルついている。

これは、何……? ?

「今すぐ手を出したいところだけど、今日のところは許してあげるよ」

服の中にあつた優斗の手が出ていく。体の異変に驚きながらもこれ以上触れられはしなれないと思つてホッとした。

「その代わり……」

大きな手が頬に添えられ、顔を固定される。

「え? 優……」

「僕の気が済むまで、キスさせろよ」

混乱する私なんて気にする様子もなく、優斗は再び唇を重ねてきた。

「な……っ……ん……ん……っ!？」

さっきよりも激しいキスを長い時間お見舞いされ、私はそのまま気を失ってしまったのだった。